

## ルサ相泊地区における植生の現状とエゾシカ密度調整のための植生モニタリング体制の検討

石川幸男（専修大学北海道短期大学）、田崎冬記・梅本和延・若原正博（(株)北開水工コンサルタント）、環境省釧路自然環境事務所

### 1：目的

知床半島の羅臼側に位置するルサ・相泊地区の低標高部は、半島におけるエゾシカの一越冬地であり、特に羅臼側では数少ない規模の越冬地である。この地区は、知床世界自然遺産地域においてエゾシカの採食圧を軽減し、植生、生態系の回復を図るために実施されているエゾシカ密度調整試験の候補地として指定されており、知床岬地区における密度調整実験に続く試験の候補地として選ばれている。このため、試験実施に際しては、その効果を検証、評価するために植生をモニタリングする必要がある。

この地区の植生の実態に関しては、環境省によって整備された 1/25000 植生図等があるものの、各群落の種組成を明らかにした詳細に関しては、従来は資料がすくなかった。そこで本年 8 月に、植生の現状を種組成レベルで明らかにする調査を実施した。この結果に基づいて、シカの密度調整の効果を評価するための植生の評価対象、方法等を提言する。

### 2：調査方法

2010 年 8 月 17 日から 19 日にかけて、相泊港からルサ川までの区間の標高約 300m 以下の地区を対象に、植生調査を実施した。調査は森林群落とササ群落を含む草本群落（草地）の 2 つの群落タイプそれぞれで、優占種によって区分した群落タイプごとに複数の調査プロットを設置する方法で行った。今回の調査では、今後の再現性を重視したことから円形のプロットを採用し、森林に設置されたプロットの場合は中心にプラスチック杭を埋め込むとともに GPS で位置情報を取得した。草地の場合には、海岸断崖の岩場に設定された場所などで杭を設置できなかったことから、位置情報の取得のみを行った。プロットの大きさは群落高に合わせて、森林では 225 m<sup>2</sup>から 400 m<sup>2</sup>、（方形区に換算して 1 辺 15m、および 20m）、また草地では 4 m<sup>2</sup>から 25 m<sup>2</sup>（方形区にして 1 辺 2m から 5m）とした。各プロットの各階層において、通常の方法で種ごとに優占度階級を判別した。

### 3：結果概要

森林群落で 10 プロット、草地で 34 プロットを設定した調査した。森林ではトドマツを主体とする針広混交林とダケカンバ林が尾根から山腹斜面に広がり、ルサ川河畔にヤナギ類からなる林とミヤマハンノキ林が確認された。草地としては、山腹斜面にササ群落が広がるとともに、一部の小凹地に湿性の草地が残存していた。過去の調査結果からは、海岸に接した急涯部分にも海岸要素を含んだ草本群落が記載されていたものの、現状では道路改修と雪崩防止工事によって吹きつけられた牧草が優占している地点が多く、さらにシカによる採食も各地で認められた。海岸沿いの急涯部分には、自然性の高い本来の草本群落はほとんどないといってよい。

### 4：シカ密度調整に向けたモニタリング対象と方法

ルサ・相泊地区においても、海岸の急斜面や小規模台地上において、知床岬地区と同様にシカの強度の採食が認められるイネ科牧草やササ類の群落が分布していることから、これらの群落にモニタリングサイトを設定し、その変化を監視することによってシカの採食圧低下の効果を検出可能である。

なお、ユネスコから密度操作などの人為的介入を停止する際の指標が求められているものの、シカの採食圧が低下した場合の回復過程の観察例はごく少ない。その開発のためには、アクセスの良いこの地区においても、林床の採食が著しい針広混交林やわずかに残された本来の海岸草原でのモニタリングも実施することが望ましい。

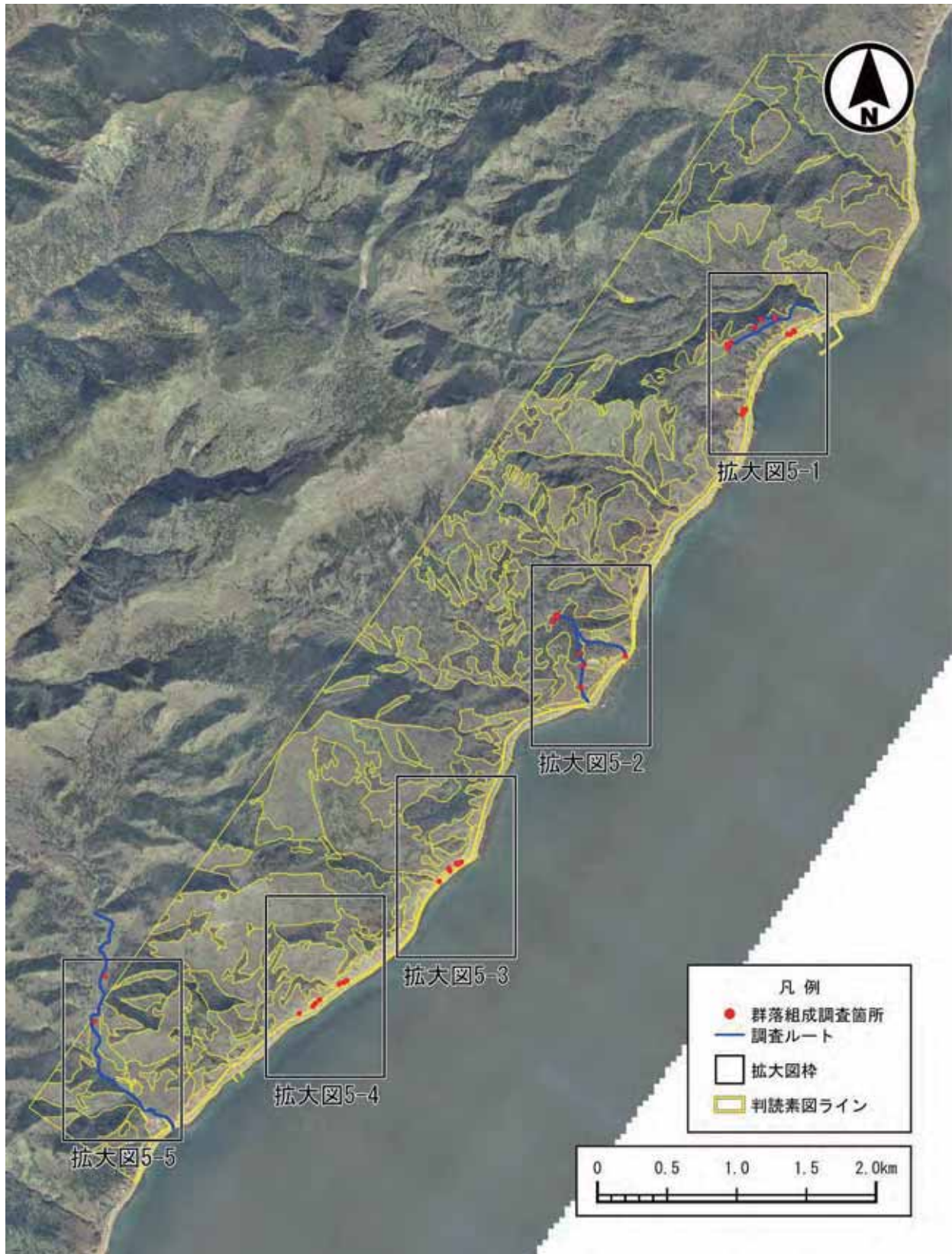


図1 ルサ相泊植生調査 全体図



図2 ルサ相泊植生調査 拡大図 5-1



図3 ルサ相泊植生調査 拡大図 5-2



図4 ルサ相泊植生調査 拡大図 5-3



図5 ルサ相泊植生調査 拡大図 5-4



図6 ルサ相泊植生調査 拡大図 5-5